

然』の2冊を世に問うことになるのである。

明石高校では主として化学を担当され、永く野球部の顧問として休日のない生活が続いた。学年主任に選ばれ、きびしい勤務になってしばらくして、体調が思わしくない状態が続いた。外地でマラリアにかかり、その薬害と思われる障害が激しくなって、休職されていた。平成7年6月が十三回忌であった。

昭和39年から平畑が会計のお手伝いを始め、ご指導をうけながら担当してきた。昭和42年ころ、県庁の会計担当者の強い指導が3年間続いた。渋谷方式に新しい方式を加えて、平畑、上岡先生、西田先生と会計部が引き継がれ、渋谷先生の確立された気風が今も続いているのである。

昭和30年代、40年代の総会のときには、室井、渋谷、当津の三先生の顔があり、会運営のスムーズな流れが毎年みられたのも懐かしい思い出になっている。

「左右性の謎」(『兵庫生物』2巻3号)の先生の論文は、現在にもそのまま展開できる議論であり、先生のお人柄がしのばれるものである。

(ひらはた まさゆき：会長)

### 猪股凉一先生の思い出

西本 裕

先生とは何度もハバチの採集に同行させていただきました。八ヶ岳の西側、入笠山に着いて荷物をほどもどかしく捕虫網と毒ビンを持って飛び出して行かれました。先生の採集スタイルは決まっています、歩くときはいつも道の左側から見て行かれました。その速度は本当にゆっくりで、植物の葉を食べているハバチの幼虫の食痕を見つけながら葉を一枚一枚裏返して、めざす幼虫を見つけるとリュックをおろして、携帯用のプラスチックシャーレの中に幼虫と食草を入れ、リュックの奥にしまわれるのでした。

先生の専門はハバチのうちでも難解な *Pachyprotasis* 属の生態と分類です。幼虫を採集して飼育・羽化させて、その生活史を一つ一つ解明してゆく非常に根気のいる仕事でした。30代の頃の先生は、夜は定時制課程の教師を、昼は兵庫県立農科大学(現神戸大学農学部)でハバチの研究を、長期の休みとなればリュックをかたいで採集の毎日、ご家族のご苦勞が忍ばれる大変な時期でした。

研究を続けること20年余り、「A Revision of the Genus *Pachyprotasis* Hartig of Japan (Hymenoptera, Tenthredinidae)」(大阪府立大学農学博士)という学位論文を提出されました。その内容は次のようでした。当時、日本に産する *Pachyprotasis* 属ハバチは、多くとも20種と考えられていたが、生態特に幼虫

の食性並びに成虫の産卵習性の調査によって、69種に分類できること、及びこれらが形態的に16の種群に分けられることでした。なお69種中52種は新種でした。因みに全世界におけるこの属のハバチは、これらの52種を含めて112種知られたこととなります。1987年には世界で初めてミツガシワハバチという幼虫が水の上を歩くことを見つけ新聞紙上で大きなニュースになりました。先生はハバチの研究だけでなく、サツキの盆栽、日本酒、俳句と大変趣味が広く人生を楽しんでおられました。今年(1995年)1月17日、兵庫県南部地震で自宅が全壊の被害を受けられ、その後の心労で、3月、肺炎のため70歳で急逝されました。ここに慎んで先生のご冥福をお祈りします。(にしもと ゆたか)

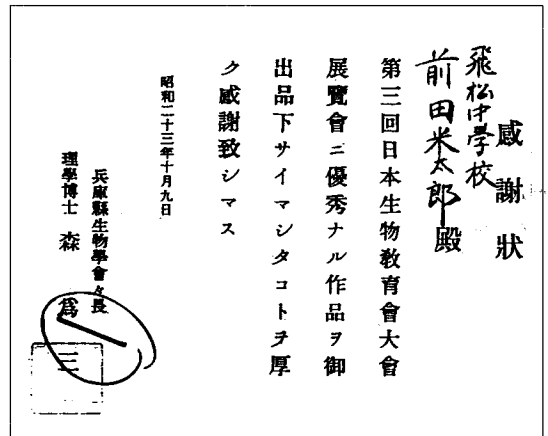
### 白川の化石

前田米太郎

白川峠

昭和14、5年頃から戦後にかけて、白川の化石集めに熱中したことがある。その頃は板宿からの市バスは、車道が終点で、ここから坂道をのぼって白川峠へ行く。峠の手前左側に小さな池があり、池のそばに凝灰岩を粉砕して磨き砂をつくっている小さな工場があった。池を過ぎると右に回って峠になるが、峠を登りつめた所に軒、峠の茶店といえそうな家があった。峠の付近は、この二つの家屋以外は雑木の林ばかりの淋しいところであった。

磨き砂をつくっている家の付近は、凝灰岩層の小山で、つるはしを割れ目に打ちこんで岩を崩していた。ガサッと大きく崩れると、時には1m四方もあるシュロの葉の化石がでてくる。「すみません。化石を採らせて下さい」と挨拶して仕事場に入っていくと、化石なんか採りに来る人もいない頃だから、迷惑がらずに採らせてくれた。



化石標本を生物教育会に出品して戴いたもの

戦後、理科研究の小中学生が多く訪れるようになってからは、採集料が要るようになったが……。

磨き砂をつくるには、崩した岩をハンマーでこぶしぐらいの大きさに砕き、広げて乾燥させ、これを電動のローラーでつぶして粉にする。凝灰岩を乾かしている所へ行くと、メタセコイア、クリ、カシ、イチョウ、ヤナギ、フウなどの葉や樹皮などの化石はいくらでもあり、ときには隕果の化石なども見つかった。

### 三木 茂 先生

化石を採集しても、植物の種名がわからないものが多かったので、昭和23年頃に、思い切って三木茂先生に、「採集した化石を見て戴きませんか」という手紙を差し上げた。先生はメタセコイアの命名者で、世界的に高名な方であったが、その先生が、私の勤めていた神戸市立飛松中学校へお越し下さることになった。そのお返事を戴いたとき、私のような無名の教師の所へ、三木先生が来て下さるなんて、夢ではないかと思った。その日、先生を東須磨の駅にお迎えしたときの感激を、今

も忘れることができない。

先生は、11時頃に来て下さる予定であったが、3時頃にお着きになった。当時は電車の数が少なく、移動に難渋した時代であったので、神戸へ来られるついでに、甲山付近の泥炭層から出るメタセコイアの隕果の採集をしてこられたので、遅くなられた由で、炭化した大きな隕果をいくつも見せて戴き、採集場所などを教えて下さった。

その後、先生の研究室へも行かせて戴いた。先生は口数が少なく、とつとつと話される方であったが、学問に対する情熱は烈々たるものがあつた。研究者はかくあるべし、という先生の無言のお教えが、今も私の心の中に生きている。

### 室井 綽 先生

白川の化石について、どんな研究がされてきたかを文献で調べたかったが、敗戦直後は本のない時代であった。兵庫高校の室井綽先生が、関係の本をもっておられると聞いて、「見せて下さい」とお願いに行き、お宅で見せ



焼跡の小学校に陛下がお着きになる

# 天覧を賜ふ 神戸市白川産化石標本

採集者 村立飛松中学校教師 前田米太郎

著者 室井 綽 先生

中道教授

天覧室に侍して

古川博二

四圍の壁も、戦災に焼けただけ、文字通りのはいきよであつたのが、粗末ながらも床板を張り、代用ガラスの窓もたてられ、茶藨を張りめぐらした壁面に、児童生徒の丹青こめた圖書作品・神戸市教育概要の大図表が掲げられ、純白の布でおおつた机の上には、私の採集した神戸市産貝類標本二百八十種が、前田氏の白川産化石二十数種と共に整然と陳列されている。白百合やカーネーションを活けた花瓶が、一すみから部屋を明るくしている。滋味を見せた盆栽には、モウセンゴケを主として十数種の小植物をあしらつてある。このところ、全く見物がえる程りつばな部屋ができあがつた。

御到着に先立つて、備え付けに遺漏の無いようにと点検がなされた。私はこの室の責任者となつていたので、十分の用意をととのえた。

時刻が迫るにつれ、もし御下問があれば、どんなにお答え申そうかと、嬉しい心配さに胸がおどる。陛下は世界的な生物学者であらせられ、殊に菌類や貝類に御造けい深いともれ承つていたので、それだけに楽しい期待が起る。何だかふと先生にお伺いするような気がする。神戸地方特産の貝類や、内海の珍種のことも聞いていただきたいなどの子供っぽい夢のような希望がわいたりして、いるうちに、早くもお着きになつたらしい空気が感じられる。

て戴くことになった。室井先生にはこのとき初めてお会いした。ご指定下さった日に、兵庫高校近くのお宅にお伺いして写させて戴いたが、今ならコピー機で、いとも簡単に複写できるのに、当時は自分で書き写すよりほかに方法がなかった。特に地図やグラフを写すのが大変だった。お部屋に簞戸やすだれがかかっていたから、多分夏であったろう。そのときのコピーは、茶色に変色し、端がボロボロになってはいるが、化石に夢中になっていた頃の記念にと大切に持っている。

古川 博二 先生

昭和22年6月11日に、戦後初めて昭和天皇が来神されたとき、神戸で採集した生物標本を見て戴くことになり、神戸市立中道小学校の古川博二先生の貝類標本と、私の白川産植物化石標本の二点が、戦災から復興したばかりの湊川・多聞小学校の二階の部屋に並べられ、古川先生がご説明役として標本の前に立たれた。陛下は軟体動物がご専門であるので、貝類については大変興味を示された由である。昭和22年発行の神戸市教育局編『教育復興状況御視察 行幸記念誌』の“天覧室に侍して 古川博二”から抜き書きをして、亡き古川先生に当日の様子を説明して戴くと、

「湊川、多聞小学校の教室は、回りの壁はもちろん、床も戦災に焼けただれ、文字通り廃墟であったのが、粗末ながらも床板を張り、代用ガラスの窓もたてられ、茶幕を張りめぐらした壁面に、児童・生徒の丹青こめた図画作品が掲げられ、純白の布で被った机の上には、私の採集した神戸産貝類標本 280種が前田氏の白川産化石 20数種とともに整然と陳列されている。……

……一種のざわめきの中に厳かな気配が伝わって、陛下は静かに天覧室へお入りになった。子供達の一生懸命に描き上げた図画を、一つ一つ御興深げにご覧下さった陛下は、やがて貝類標本の所へ玉歩をお移しになった。

田岡校長が私を紹介して下さいました。陛下はふと私の方を振り向かれ、軽くご会釈を賜った。いや夢ではない、真実そうだったのだ。私ははっとして頭を下げた。目頭が熱くなる。陛下はそれから貝に眼をお移しになり、熱心にご覧下さった。

生物学者であらせられる陛下には、これ位のコレクションは物の数にも入らぬと思われるけれども、それでも時々お立ち止まりになって、標本に息がかかるほどにまでお顔を近づけてご覧下さった。殊に陸産種のあたりでお眼に止まったものがあったのか、じっと見入り遊ばされる。あそこには神戸の代表的カタツムリやキセルガイなどがあるはずである。陛下のお眼に止まった貝の幸せを考え、わが身の光栄がつくづく思われる。他面、父に成績を見てもらう子のような喜びがこみ上げてくる。……」（以

下略。部分的に加筆）

満面に笑みを浮かべて、この日のことをお話になる古川先生のお姿が、目に見えるようである。

その後、標本は「天覧を賜う」という肩書きがついて三越その他で公開された。古川先生の標本は、先生のキャリアからいっても、数からいっても、屈指のコレクションであったが、私は若年で、標本数も少なく、ただ集めただけの恥ずかしいもので、今思うと、他に立派な研究者がいらっしゃるのに、敗戦のどさくさとはいいながら、お粗末なものを、よくも誇らしげに出品したものだ、我ながらその厚かましさにあきれ、冷汗三斗の思いがする。

白川小学校

化石産地の神戸市立白川小学校は、たくさんの化石が保存されているのではないかと思います、親友の杉田隆三君と白川小学校を訪ねてみたが、生徒が集めたと思われる化石の一杯つまったミカン箱が、1、2個あったくらいで、全く整理されていなかった。そして教頭さんが、「食用にもならん化石の研究をしても、何の役にもたさんから、生き物の研究をするなら、イーストを増やして売りなさい、その方が金になるし、世間の役に立つ」といわれて、ほうほうの体で学校を辞した。

このとき、私よりも若い先生が化石の説明をして下さったが、この方が渋谷龍二先生であった。

おわりに

その後まもなく、飛松中学校を退職して、再び学生生活を送ることになったが、その大学に古生物の先生がおられなかったので、この道を断念してハエを飼うことになった。

今でも白川を通るときには、あの池はどの辺りだったか、峠の家はどこにあったかななどと、昔の様子を思い出そうとするが、今の白川は、地形が一変してしまっていて、当時の風景は想像することができない。しかし、頭の中の白川峠は、5、60年前のままで、「白川」という名を聞くと、池のそばの小さな磨き砂の工場が目の前に浮かび、温顔の三木茂先生を思い出すのである。

（まえだ よねたろう：常任理事）

## 淡路島の思い出

富川 哲夫

私が但馬の養父中学校から淡路島の県立三原高校へ転動したのは昭和38年4月、37歳の時でした。まもなく兵庫県生物学会の総会が県立洲本高等学校で行われましたが、この年に初めて初代会長森為三博士の寄付金により